2022 11.14 vol.1017

JA全農ウィークリー WEEKLY

2面

「JA資材店舗CS甲子園2022」表彰大会を開催

肥料・農薬・資材の優れた陳列やお店づくりを表彰（耕種資材部）

4-5面

「米穀事業」高尾雅之担当常務理事に聞く 令和4年の中間総括と来年に向けた戦略（広報・調査部）

「わくわくモーモースクール」で酪農家（左）に教わりながら搾乳体験をする児童（2面）

日本の酪農を応援シリーズ第3弾で販売中の「抹茶ミルク」（3面）

「JA資材店舗CS甲子園2022」の受賞者ら（2面）

2 3年ぶりに「わくわくモーモースクール」（秋田県本部）

3 日本の酪農を応援シリーズ 第3弾「抹茶ミルク」（酪農部）

ニッポンエールの魅力をシンガポールに発信（全農インターナショナルアジア㈱）

ドローン防除の受託事業が108ヘクタールに拡大（千葉県本部）

6 プロフェッショナルを追う（10） JA全農たまご株式会社 法務・コンプライアンス本部 品質保証部 東日本品質管理課 鈴木佳乃子さん（広報・調査部）

7 JAズームイン（JAなす南・栃木）

8 銀座三越のマルシェで「JA全農 秋の大収穫祭」（園芸部）

「ニッポンエール メロン＆ミルク」新発売（営業開発部・酪農部）

JAタウンショップ紹介 JA香川県 さぬき旬彩館

Web版JA全農ウィークリーはこちらから ▶▶▶▶▶▶▶

https://www.zennoh-weekly.jp/

Web限定

「神奈川 6種の彩りハーバー」県内JA直売所で販売（神奈川県本部）

世界最大級の食品見本市「SIAL PARIS 2022」に出展（JA全農インターナショナル欧州㈱）

「とうほく未来Genkiプロジェクト総括フォーラム」で全農の取り組みを紹介（全農東北プロジェクト）

News!

「JA資材店舗CS甲子園2022」表彰大会を開催

肥料・農薬・資材の優れた陳列やお店づくりを表彰

耕種資材部

全農は10月14日、「JA資材店舗CS甲子園2022」の表彰大会を開催し、優勝・準優勝店舗を含めた受賞10県11JA16店舗が参加しました。表彰大会の実開催は前身の「JA-POP甲子園2019」以来3年ぶりになりました。

全農の購買事業部門が企画する最大規模の大会で、今年は全国40府県から128JA495店舗が参加しました。大型陳列部門ではJA花巻グリーンセンター東和、簡易陳列部門ではJAふくしま未来国見資材センターが優勝に輝き、優勝の喜びや店舗での取り組み事例を発表しました。POP（店内広告）陳列を行った効果として、グリーンセンター東和から「電気柵・土づくり肥料の販売額アップ」「組合員から陳列のみならず取り組みに対してお褒めの言葉を頂き職員のモチベーションアップにもつながった」、国見資材センターからは「営農情報・希釈倍率設置によりお客さまとの会話増加」「取り組みを通じて醸成したチームワークで売り上げがアップした」などコメントがありました。

耕種資材部では、今後も大会を通じて、購買拠点活性化による組合員満足度向上と春の当用期における実績拡大を図ることを目指していきます。

「JA資材店舗CS甲子園2022」の受賞者ら

2022大会の主な表彰店舗

部門	賞	県名	JA名	店舗名
大型陳列部門	優勝	岩手県	JA花巻	グリーンセンター東和
	準優勝	茨城県	JA水戸	南部営農資材センター
		島根県	JAしまね西いわみ地区本部	益田グリーンセンター
簡易陳列部門	優勝	福島県	JAふくしま未来	国見資材センター
	準優勝	山梨県	JAフルーツ山梨	塩山北支所
		長野県	JA松本ハイランド	JAファーム今井

News!

3年ぶりに「わくわくモーモースクール」

乳牛やヤギを連れて訪問、児童たちが搾乳を体験

秋田県本部

秋田県本部が事務局を務める秋田県牛乳普及協会は10月21日、由利本荘市の西目小学校で「わくわくモーモースクール」を開催し、5年生38人が参加しました。

この取り組みは、児童たちに普段あまり接することのない牛との触れ合いをとおし、命のぬくもりを感じ、酪農への関心を持ってもらおうと開催。今年度は3年ぶりの実施となり、9月の横手市の増田小学校に続き2回目の開催となります。

当日は、講師として酪農家の柴田睦さんと瑞穂さん（農事組合法人新林牧場）が、西目小学校に乳牛とヤギを1頭ずつ連れて訪れました。児童たちは指導を受けながら慣れない手つきでおそるおそる搾乳を体験し、「難しかったけれど牛のことを考えて優しく乳搾りができた」と話しました。

また、牛をスケッチしたり、聴診器で牛やヤギの心拍音を確かめたりして触れ合いを楽しむ姿が見られました。

柴田さんは、「牛乳をたくさん搾るので、皆さんたくさん飲んでください」と伝えました。

柴田さん（左）から教わりながら搾乳体験をする児童

ヤギの心拍音を確かめる児童たち

News!

日本の酪農を応援シリーズ 第3弾「抹茶ミルク」

11月1日から数量限定で発売中

酪農部

全農は、消費拡大の輪を広げる取り組みの一環として、牛乳を50%以上使用した「抹茶ミルク」を開発しました。11月1日から数量限定で発売中です。

これまで日本の酪農を応援することを目的に「ミルクティー」と「カフェ・オレ」を販売し、大きな反響がありました。飼料価格の高騰など厳しい環境で懸命な努力を続ける酪農家へエールを送るとともに、「乳の価値・おいしさ」を届けるために開発したシリーズ第3弾になります。

原材料にはJA京都やましろの「抹濃（まっこい）（抹茶）」とホクレンのてん菜糖を使用し、缶には酪農家がデザインしたかわいい乳牛などをあしらいました。

全農が運営する産地直送通販サイト「JAタウン」内の酪農部公式ショップ「酪市酪座」をはじめ、Aコープや直売所などで発売しています。

酪市酪座はこちら

商品情報はこちら

News!

ニッポンエールの魅力をシンガポールに発信

世界に向けて“にっぽんからエール”を

全農インターナショナルアジア㈱

全農インターナショナルアジア㈱は10月14～16日、シンガポール中心部のタンジョンパガで開催されたJR東日本主催の「THE JAPAN RAIL FAIR 2022」に出展し、「ニッポンエール」をPRしました。

今回は「ニッポンエール」のコンセプトに加え、「にっぽんからエールをおくろう」ということでシンガポールを盛り上げるとともに、日本産農産物加工品を楽しんでもらおうと参加しました。「ニッポンエール」のドライフルーツは、来場者から「おいしい」「デザインがかわいい」と好評で、いろいろな種類をまとめ買いする方もいました。

同イベントは「日本の鉄道」や「日本の文化」など日本の魅力を発信し、インバウンドの促進を目的に行われ、3日間で約1万2000人が来場するなど大変にぎわいました。

「ニッポンエール」の多彩な加工品をPR

News!

ドローン防除の受託事業が108ヘクタールに拡大

水稲・園芸作物で7JAと連携、前年実績の5倍に

千葉県本部

千葉県本部は、生産現場における作業軽減と適期の病害虫防除による農産物品質の維持を目的として、ドローンによる農薬散布などの請負作業の事業化を目指し実証を行っています。

この実証では、生産者からの申し込みをZ-GISで管理し、現場立ち会いを簡略化しています。また、全国農業ドローン連合会を立ち上げたドローンプロフェッショナルサービス㈱とともに請負作業の実証に取り組んでいます。

ドローンによる散布は、無人ヘリによる水稲の空散事業では対応できない地区や散布適期が合わない圃場（ほじょう）、園芸作物を対象としています。昨年度、3JAの水稲・サツマイモの22㌶から今年度は新たに4JAとバレイショ・サトイモにも取り組み、計7JA・108㌶（前年実績の5倍）へと拡大しました。ドローンを活用した事業構想を県内JAと連携し、進めていきます。

ドローンを活用した農薬散布

「米穀事業」

令和4年の中間総括と来年に向けた戦略

収穫を終えた令和4年産米。今年産の取り組みの中間総括と来年産に向けての戦略について、米穀農産事業を担当する高尾雅之常務理事に聞きました。【広報・調査部】

全農 米穀農産事業担当常務理事 高尾雅之

令和4年の米穀事業について語る高尾常務

組合員やグループ一丸で作付け転換進む

――まず4年産を振り返って作付け転換の結果をどのように評価しますか。

10月20日に農水省の食糧部会で、主食用米以外の品目への作付け転換の結果が公表されました。需給バランスを保つために設定した減少幅の目標3・9万ヘクタールに対し、実績5・2万ヘクタールと大幅な超過達成になりました。

その結果、収穫量も前年比30・4万トン減の670・3万トンとなる見込みです。700万トン弱ある年間の需要量を大きく下回る水準であり、5年6月末の在庫見通しは191万～197万トンとなる見込みです。これは、当初の目標200万トンを下回る結果となっており、組合員をはじめJAグループ関係者が一丸となって作付け転換に取り組んだ賜物（たまもの）だと思っています。

――結果として需給は改善されましたが、価格動向についてどのように見通していますか。

新型コロナも落ち着きをみせて業務用を中心に需要が回復しています。それらを背景に国が公表した4年産の9月末時点での相対取引価格（玄米60キロあたり、税抜き、包装代抜き）は1万2773円と、3年産の通年の平均価格より1058円の値上がりとなっています。ただし、値上がりしたといっても一昨年産よりは安く、適正な価格に徐々に戻りつつあるという感じです。

現在、3年産以前の持ち越し在庫が50万トン程度あります。1年前の10月末時点は42万トンほどだったので、近年最大の持ち越し在庫数です。持ち越し在庫が大量に残っている中で微妙な需給バランスの上にある薄氷の販売価格とも考えられます。今後、コロナ次第で下に動く可能性もあります。いずれにしても今後、各産地が足並みをそろえて販売推進することが重要になってきます。

資材高騰で厳しい経営、適切な価格転嫁へ

――生産者は資材高騰で非常に厳しい経営状況だと思います。全農として現在取り組んでいることについて教えてください。

今年8月に全中とともに、お米の卸団体や生協の団体など関係9団体に対して、「適正な価格形成への理解」を要請しました。肥料価格をはじめ、生産資材価格など生産コスト自体が上昇しているので、その窮状を訴えるとともに、団体として傘下の会員や組合員に適切な価格転嫁をお願いしてもらいたいという内容です。客観的なデータやエビデンスに裏打ちされた生産コストの上昇を示し、それを根拠に「持続可能な米の生産・供給には、再生産可能な適正な価格形成が必要」と価格転嫁への理解を求めました。

また、精米工場でも電気料金や包装資材代など製造コスト、配送運賃が値上がりしているので、生産現場だけではなく米穀の卸売業者を含む米穀業界が一体となって、生協・量販店などの理解を得ながら適切に価格転嫁を実現することが重要な取り組みと考えています。

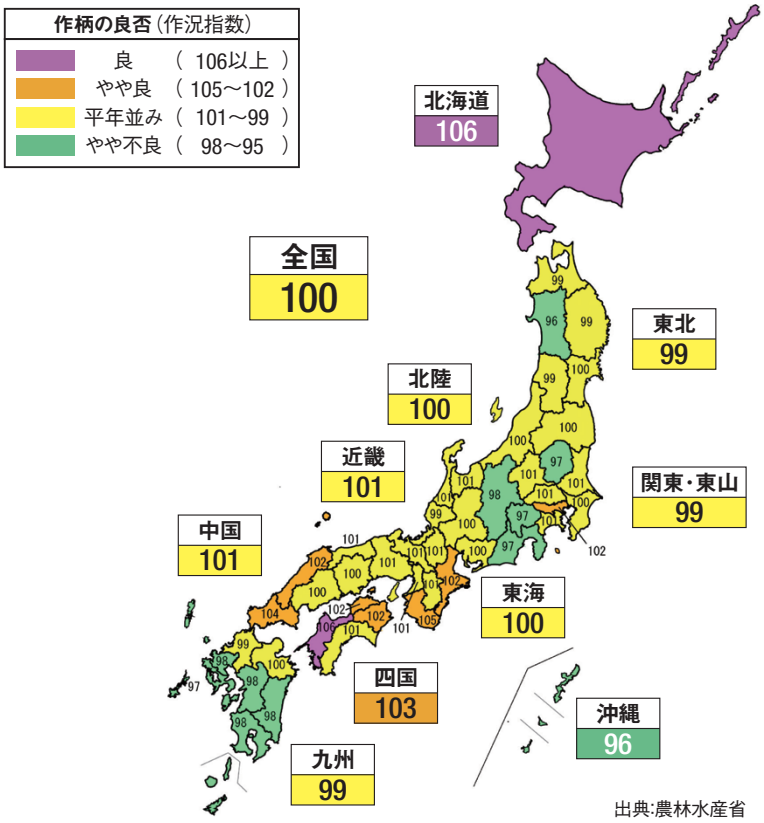
5年産も需要に応じた計画的生産を徹底

――5年産以降に向けて取り組むべき課題をどのようにとらえていますか。

新型コロナやウクライナ情勢などこれまでに経験したことのないことが突如として発生する世の中となり、米価や需給動向がどのように動くかは不透明な状況です。ただ、国内の人口減少は続きます。米の消費減のトレンドをいかに食い止めるかということを念頭に置きながら課題を整理して対応策をまとめます。

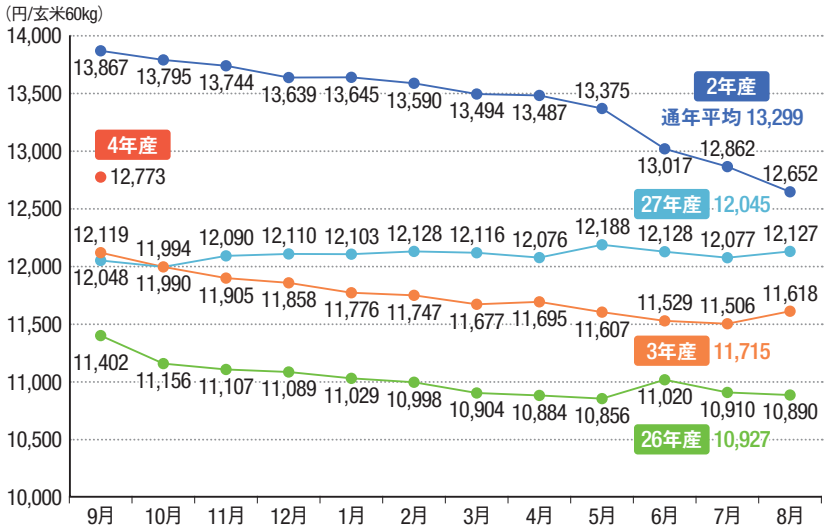
まずは需要に応じた計画的生産を徹底すること。将来的に農家が減ることによる生産減と、国内の人口が減ることでの需要減がバランスする時期がいつか到来します。そのときに備えて、「川上（生産）への関与」「川中（流通）での効率化」「川下（消費）での安定販路の確立」という大きな3本柱でとらえて仕事を進めていきます。産地ではカントリーエレベーター・ライスセンターや農業倉庫、精米施設などがかなり老朽化しているので、インフラを整備するのも喫緊の課題ととらえています。

全国農業地域・都道府県別作況指数（9月25日現在）



出典：農林水産省

農水省公表相対価格（4年産・9月末）



（備考）農林水産省公表相対価格にもとづき作成。包装代・消費税相当額を控除した価格。

――販売を含めた来年のマーケットをどのように見通していますか。

急激な需要拡大や販売好転の可能性は低いとは思いますが、円安を背景としたインバウンドへの対応、米輸出についても積極的に取り込んでいきます。例えばカリフォルニア米やオーストラリア米の価格と比べると日本の米の価格も接近してきているので、輸出に対しては今がチャンスととらえて輸出の拡大にも取り組んでいきます。

外国産から国内産へ企業とも連携強めて

――中長期的に全農として考えている戦略について教えてください。

農業が魅力ある産業に戻るために、いろいろな施策を打ち出し実施していくことが考え方の基本です。

食料安保を考えれば、米ばかりではなく、外国産から国内産への転換が可能な麦や大豆、飼料作物などに力点を置いた作付け転換を図ること。それに伴って農水予算や政策支援の獲得を全中と協力して取り組んでいるので、それらを一つずつ実現しながら、あるべき姿にもっていきたいと考えます。

加えてゲノム編集など新たな技術によるスピード感のある品種開発への関与も強めていきたいと考えています。

他企業とのアライアンスについては、近年、木徳神糧やスシロー、サトウ食品、日清製粉らと資本・業務提携を行ってきましたが、今後も社会的にインパクトがあり、本会の理念に賛同してくれるような企業と提携できる機会を見つけていきます。

プロフェッショナルを追う(10)

JA全農たまご株式会社 法務・コンプライアンス本部
品質保証部 東日本品質管理課　鈴木（すずき） 佳乃子（かのこ）さん

品質管理と正確な品質表示で自信をもって安心・安全な商品を届ける

全農グループには専門的な業務に従事している社員がいます。今回は全農グループで鶏卵の卸売販売を担うJA全農たまご㈱で品質管理に携わる鈴木佳乃子さんに迫ります。【広報・調査部】

商品のラベルを確認する鈴木さん

――仕事内容について教えてください。

主に担当しているのは、「産地相互確認」「品質表示のチェック」「TAMAGO COCCOの品質管理サポート」です。そのほか、品質管理課の仕事としては、商品仕様書の管理、クレーム管理や分析、未然防止・再発防止サポート、賞味期限の日付チェックなど、さまざまな品質に関する業務があります。

――産地相互確認とはどのようなことをするのですか？

当社は大規模な工場から家族経営の農場まで、全国100軒ほどのメーカー、生産者に製造を委託しています。消費者に届ける商品に問題がないか、安心・安全な商品であることが自信を持って言えるように、メーカー、生産者とともに品質管理に取り組んでいます。例えばトラブルが発生した際の対応マニュアルはありますか？といった基本的なことから、工場内の清潔さ、薬剤の管理など、68項目あるチェックリストに基づいて実際に現地で確認します。昨年6月からHACCP（危害分析重要管理点）に沿った衛生管理が制度化されたので、その確認も行っています。情報共有も兼ねて年に1回以上訪問し、良い点や改善点を確認してお互いにレベルアップしていけるよう取り組んでいます。なお、当社が運営するスイーツ店「TAMAGO COCCO」では2カ月に1度、基本的な衛生点検を行っています。

――品質表示のチェックとは？

鶏卵をはじめ、当社が販売するゆで卵や液卵、スイーツの表示を確認しています。パック卵の場合、食品表示法を基本に鶏卵公正取引協議会が定めるルールに基づいて、原産地や賞味期限、保存方法などを表示しなければなりません。加工食品なら栄養成分を書かなければいけないなど、商品によって表示のルールは異なります。また、景品表示法では、消費者に誤解を与えるような表示は禁止されているので、写真や表現なども注意します。ラベルはもちろん、営業担当が作成するPOP（店内広告）やポスターなどの販促資材も確認しています。

クレームがあった商品を検査することも

――心がけていることは？

衛生点検後、改善をお願いする際は、なぜそうしなければいけないのか根拠を伝えることで、ちゃんと取り組んでもらえるように心がけています。食品表示でも、法令の説明をしたり、最近起きた事例を伝えたりして、具体的に説明するようにしています。表示のルールは都度改定されるし、品質管理課はご意見番のように頼りにされることも多いので、食品表示診断士の資格を取得したり、セミナーを受けたりとスキルアップのために日々勉強が必要です。

――今後の目標は？

品質管理の基本は同じですが、例えば鶏卵の工場と煮卵などの加工食品の工場は見る観点が違うし、工場によって規模や設備も異なります。たくさんの産地を訪問して経験を積み、安心・安全な商品をお届けするサポートができればと思っています。

JAズームイン

新規就農者支援や園芸施設の助成で産地の維持拡大、自己改革の実践へ

JAなす南（栃木県）

概要	（2022年2月28日現在）
正組合員数	8110人
准組合員数	4485人
職員数	201人
販売品取扱高	30億9千万円
購買品取扱高	17億3千万円
貯金残高	924億8千万円
長期共済保有高	2676億7千万円
主な農畜産物	米、イチゴ、梨、桃太郎トマト、中山かぼちゃ、みなみちゃん南瓜、花きなど

栃木県の北東に位置するJAなす南は、那須烏山市と那珂川町の1市1町を管内とし、米や園芸、畜産が盛んです。創造的自己改革の実践にも積極的に取り組んでいます。

行政と一体で研修・後押し 南那須農業アカデミー

JAや行政が一体となり担い手の確保や育成を目指して南那須地域新規就農者支援対策協議会を設立しています。同協議会は2021年度から「南那須農業アカデミー」を開講し、新規就農希望者を受け入れ農業技術や経営手法を学べる1年間の研修を行っています。

梨部門で研修をした中村麻衣さんは、那須烏山市で観光フルーツ農園の開園を志し、第1期生として受講しました。22年4月から那須烏山市認定新規就農者の認定を受けて、旧「阿相りんご園」を第三者継承し、新たに「体験型農園フルーツファーム烏山」を開園。現在は梨の出荷を終え、リンゴの販売とリンゴ狩りを行っています。

第1期生として受講しリンゴ園を第三者継承した中村さん

イチゴ部門で今年4月から研修生になった山本幸志郎さんは、家族の紹介で同制度を知り、那珂川町でイチゴ農家になろうと応募しました。研修生に栽培技術や経営管理を指導する「とちぎ農業マイスター」として栃木県塩谷南那須農業振興事務所が認定した同JAいちご部会青年部9人の元で研修しており、23年4月から就農し、約15アールの圃場で経営を始める予定です。

新たに園芸施設に助成 新規・規模拡大を支援

22年度から管内での園芸作物生産基盤の維持・向上、所得増大につなげるため、園芸作物の新規栽培や規模拡大を目指す農業者に対し、栽培施設（パイプハウス・果樹棚）導入費用の一部助成を始めました。支援事業では、園芸作物を栽培する施設の設置費用を上限150万円に4割以内で助成。国や県の事業と併用を可能として自己負担を減らすことができます。組合員や今後組合員になる見込みの新規就農者などが対象で、6月から募集を開始し、現在10人の申請を受け付けました。

また、生産者が年々減少している中、カボチャのブランド産地として産地の維持拡大を図るため2022年産かぼちゃ産地育成事業に取り組みました。面積増反・維持対策事業は既存部会員の面積増加に対し、1アール当たり5000円の助成。新規生産者育成事業では、新規生産者に22年産の生産資材、苗代金など栽培経費の主である苗代や晩霜対策の被覆資材一式を全額助成しています。22年度は中山かぼちゃ部会で新規生産者2人、面積増反が21アール、みなみちゃん南瓜部会で新規生産者2人、面積増反が44アールになりました。

イチゴ部門で今年から研修生になった山本さん

全農 ZEN-NOH COUNTDOWN JAPAN
JA全農提供FMラジオ番組(TOKYO FM/JFN38局)
毎週土曜日13:00〜13:55
東京・半蔵門のアースギャラリースタジオより生放送!

銀座三越のマルシェで「JA全農 秋の大収穫祭」

旬の国産青果物そろえて需要拡大をPR

旬の野菜や果物をそろえた「JA全農 秋の大収穫祭」

園芸部はフードマーケット事業部とともに10月22日、東京の銀座三越9階でみのりみのるマルシェ「JA全農 秋の大収穫祭」を開催しました。【園芸部】

生産資材の高騰などで農業経営が厳しい状況に置かれる中、少しでも国産青果物の需要を拡大するため、全国の旬の野菜や果物をそろえたマルシェを開催しました。キャベツやブロッコリー、ダイコンなどの野菜セットや、「シャインマスカット」と柿、ミカンの果物セット、複数の品種を味わえるリンゴセットやサツマイモセット、キノコセットなど、バリエーションに富んだ商品を販売しました。

あわせて、広報・調査部と園芸部が連携して作成したPOP(店内広告)や生産者の実情を知らせるチラシを配布するなどの取り組みを行いました。

当日は多くの方が来店され、スタッフの説明を聞いて商品を購入する姿なども見られました。

「ニッポンエール メロン&ミルク」新発売

伊藤園と開発、「国産牛乳応援プロジェクト」第1弾

全農は「国産牛乳応援プロジェクト」の第1弾商品として(株)伊藤園と「ニッポンエール メロン&ミルク」を開発し、11月7日から全国の量販店などで発売しています。【営業開発部・酪農部】

全農は、㈱伊藤園とともに全国の特色ある農産物を使用した清涼飲料水を共同開発してきました。今回はようやく整ってきた牛乳の生産基盤を応援するために、消費が最も落ち込む冬季に向けて「国産牛乳応援プロジェクト」の第1弾となる「ニッポンエール メロン&ミルク」を発売しました。パッケージには、「やっぱりおいしいニッポンの牛乳」の共通ロゴを使用し、牛乳の消費拡大と魅力を発信し、全国の酪農家を応援します。

原材料には、糖度が高い北海道産富良野メロンと国産牛乳を使用し、メロンの甘い風味と厚みのあるミルク感を楽しめます(果汁1%)。メロンと牛乳のおいしさや魅力を全国にお届けすることで、生果や牛乳の販売拡大にもつなげ、メロン農家と酪農家の皆さまを応援していきます。

やっぱりおいしいニッポンの牛乳
国産牛乳使用
国産牛乳応援プロジェクトロゴ

ニッポンエール メロン&ミルク 450g 180円(税込み194円)

JA全農のインターネットショッピングモール
JAタウン ショップ紹介

JA香川県 さぬき旬彩館

「さぬきゴールド」は香川生まれの国産ゴールドキウイです。果実はごろんと丸い形で、重さは平均180〜219グラムと大きく、果肉は鮮やかな黄金色。酸味が控えめで、フルーティーな果汁が口いっぱいに広がります。

食べ頃は、果実を縦に持って上下から指で押し、桃くらいの軟らかさになった頃。芳醇(ほうじゅん)な甘い香りのサインも出してくれます。1年のうち、わずかな期間しか味わうことができない希少な「さぬきゴールド」をお楽しみください。

さぬきゴールド 4Lまたは3L/1.5キロ……4640円(税込み)

ご注文はこちらから

▶ JAタウンはこちらから https://www.ja-town.com
▶ お問い合わせは shop@ja-town1.com

発行／全国農業協同組合連合会 2022年(令和4年)11月14日発行(毎週月曜日発行)
第3413号 編集・発行人／広報・調査部 新妻成一
〒100−6832 東京都千代田区大手町1丁目3番1号JAビル TEL03(6271)8055

『JA全農トピックス』のツイッターはこちらから

私たち全農グループは、生産者と消費者を 安心で結ぶ懸け橋 になります。